44. 旧三菱重工業熊本航空機製作所の社宅街における土地利用の変遷に関する研究
-熊本市健軍エリアを対象として-

A Study on the Land Use Change of the Company Town in Kumamoto Aircraft Factory of Mitsubishi Heavy Industries
-Focused on " Kengun Area" in Kumamoto City-

鄭 一止*・辻原 万規彦**
Ilji CHEONG, Makihiko TSUJIHARA

If the company town was made in suburbs, the huge company town usually changed to huge housing area after the company was closed. In the case of Kengun Area in Kumamoto city, the result was different. In this paper, we revealed the process of how the company town was changed to one of the biggest center areas of the Kumamoto city. We found that follows: (1) The company town was made through lots of modern skills of urban planning. (2) The urban infrastructure facilities of the company town became the base of the new town. For example, in the big empty lot, lots of newcomers came and opened their own shops. (3) The pick of the shopping mall which was changed from company town was around 1978s along the Kengun Shopping Street. (4) The block shape has not been changed since the company was closed.

Keywords: Company Town, Kengun Area, Kumamoto Aircraft Factory of Mitsubishi Heavy Industries, Land Use Change
社宅街、健軍エリア、三菱重工業熊本航空機製作所、土地利用の変遷

１．はじめに
1-1. 研究の背景と目的

本研究は、社宅街を中心とした健軍エリアが熊本市東部の中心地としてどのように成長したのかに着目するものである。熊本市には、第二次世界大戦下の 1943 年から入居がはじまった三菱重工業熊本航空機製作所（以下、熊航）の社宅街があり、戦後には小売店や飲食店の連なる繁華街として発展してきた健軍エリアがある。無秩序に広がる熊本市郊外と違い、そこにはグリッド状の道路網が広がっており、計画的につくられたことは分かりやすい。しかし、かつての名残はほとんど確認できず、どのような経緯でつくられたのかを知る人は少なくなっている。

熊航と社宅街に関しては、元社員であった岡野(1989)[1]や中西(1994・2000)[2][3]によってオーラルヒストリー形式でその概要が明らかにされており、麻田ら(2011)[4]は建築史の観点より社宅街の形成史と社宅の残存状況について明らかにしている。

一方、社宅街の変遷プロセスに関する研究は、様々な観点で行われてきた。角ら[5]は苫小牧を対象に当時の社宅の実態と住居地への変遷プロセスに着目した。中野[6][7]は倉敷や日立を対象に社宅街の形成史とともにこれらが市街地形成に与えた影響に着目した。一方、鈴木[8]は、砂川を対象に自治体の市街地整備が社宅街の変容に与えた影響に着目した。足立ら[9]は、炭鉱地域を対象に人口構造に着目し、住宅地の開発手法が社宅街の縮退プロセスに与える影響について研究を行っている。

しかし、中心市街地から離れた郊外に立地しながら、社宅街の撤退後、新しい中心地として成長できた事例に関しては、その変遷プロセスが必ずしも明らかにされていない。そこで本研究は、先行研究の成果を踏まえながらも、土地利用の変遷に着目し、社宅街の跡地がどのように熊本市東部の中心地として成長したのかを明らかにすることを目的にする。

図１ 社宅街の風景(1943) (1)

図２ 社宅の様子(1943) (2)

図３ 健軍商店街の風景

図４ 残存社宅の様子

1-2. 研究方法

本研究では、熊航と社宅街に関する文献調査、住宅地図と空中写真による土地利用調査、ヒアリング調査、現地調査をもとに健軍エリアにおける社宅街の形成史と戦後の土地利用変遷について述べる。構成は、(1)戦時中の社宅街の形成史と都市基盤施設の拡張、(2)戦後の建物用途の変遷、(3)戦後の街区の変遷という３つに分かれる。

(1) 戦時中の社宅街の形成史に関しては、三菱重工業名古屋航空宇宙システム製作史料室所蔵の「カミク工事 福利

* 正会員 熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士（工）(Assistant Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.)
** 正会員 熊本県立大学環境共生学部 教授・博士（工）(Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.)

施設配置図」[3]など三菱重工業所蔵の資料、空中写真(1947年[4]、2003年[5])、岡野（1989）などの既往文献、ヒアリング調査[6]をもとにまとめる。また、岡野（1989）、三菱重工（1956）[10]、熊本市史（1994）[11]などの既往文献と空中写真（1956年[7]、1969年[8]、2003年）、住宅地図（1965年[12]の住宅案内図）をもとに健軍エリアにおける都市基盤施設の変遷について、形成期・成長期・拡張期・安定期の４つの時期別にまとめる。

(2) 建物用途に関してはまず、「カミク工事 福利施設配置図」と住宅地図（1958年の住宅案内図[13]、1978年[14]・2001年[15]・2016年[16]のゼンリン住宅地図）をもとに社宅街における建物用途図を作成した上で、用途別の棟数を集計した。用途の変遷は形成期・成長期・安定期・衰退期の４つの期間に分けて、分析を行う。

(3) 街区に関しては、「カミク工事 福利施設配置図」と住宅地図（1958年の住宅案内図、1978年・2001年・2016年のゼンリン住宅地図）を比較することで、街区の変遷について分析を行う。

1-3. 健軍エリアの概要

健軍エリアは熊本市東区に位置しており、熊本市電の終点である健軍町停留場と健軍商店街を中心とした若葉校区と泉ヶ丘校区を主に指す。市電の走る電車通りと健軍商店街沿いは、東区としては唯一の商業地域であり、容積率最大400%まで開発可能な区域である[9][10]。小売店、飲食店などの商業施設だけでなく、医療施設、金融機関、小中高校、各種官公署が集積しており、繁華街と位置づけられる。背後地には住宅密集地が広がっており、健軍町停留場を中心に半径１キロ内に６つの小学校（1955年までは健軍小と秋津小のみあったが、その後、泉ケ丘小、若葉小など四校が増設）が集まっている[11]。広域的には熊航と飛行場の跡地まで含む。

２．三菱重工業熊本航空機製作所と社宅街[12]

2-1. 戦時中の社宅街の建設

三菱重工業は1941年に陸軍航空本部の要請を受け、熊本市健軍エリアの広大な田畑に熊航を設置した。1942年の熊本市市街図[13]では、中心地市街地と今の益城町の元である木山町をつなぐ旧木山街道（電車通り）と健軍村のみ確認できる。1944年１月から生産と建設を並行する形で熊航が開設された。熊航の周辺には熊本陸軍飛行場（以下、飛行場）はもちろん、熊航で働く社員や工員のための社宅や寮（図５中の右下方）、付属病院、工員を養成する青年学校が揃い、通勤者のため市電が延長されるなど、ゼロからつくりあげる大規模なまちづくりであった。

熊航は、敷地の中央を走る道路から阿蘇連峰がよく見えるように、東南側に延びる旧木山街道の軸から約12度北東側に振った形で配置された。社宅街としては、熊航の南部の健軍町6,000番地周辺、南西部の江津周辺、北西部の帯山周辺にそれぞれ「健菱園」（2082戸の工員社宅）、「水菱園」（180戸の職員社宅）、「前菱園」（268戸の工員社宅）と寮（健菱寮と秋津寮）がつくられ、寮と合わせて収容能力が14,860名に至ったとされる（図５）。

熊航と飛行場の敷地買収と建設は陸軍航空本部が、社宅

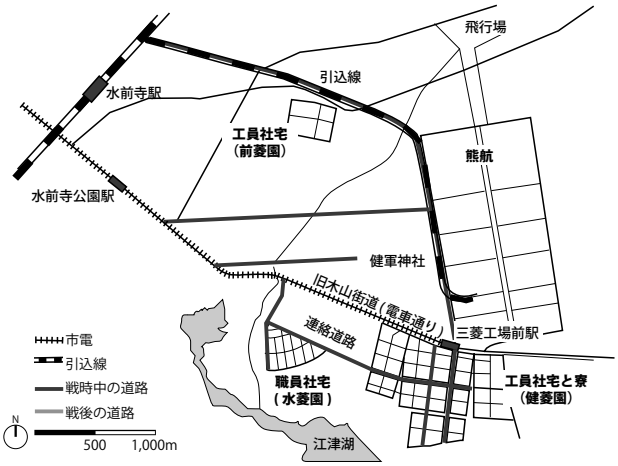

図５ 戦時中の健軍エリア周辺の都市基盤施設(1945)[14]

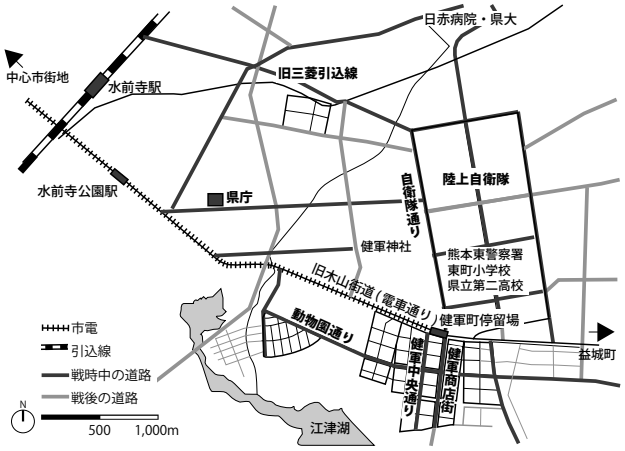

図６ 現在の健軍エリア周辺の都市基盤施設(2016)[15]

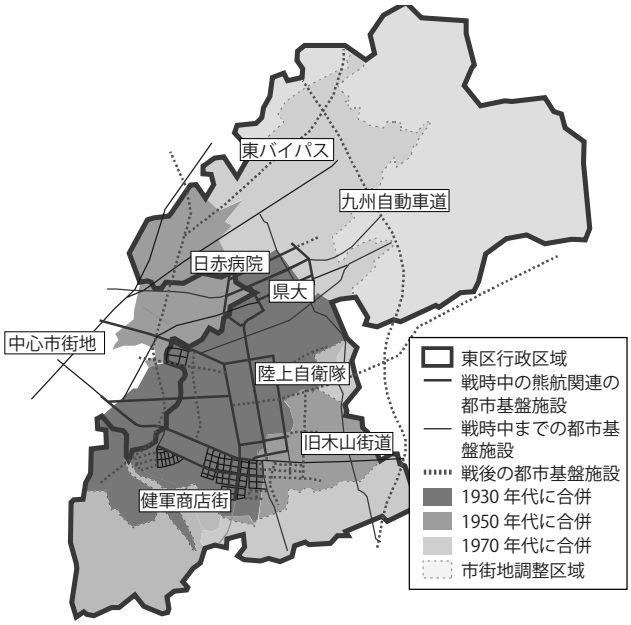

図７ 東区における健軍エリアの位置づけ(2016)[16]

表1　主な出来事[17]

年度	健軍エリアにおける主な出来事
1941年	・陸軍より、生産能力増強のための官設民営工場建設計画が指達。
1942年	・熊本に工場建設が決定。 ・熊本工場の建設工事に着工。
1943年	・三菱熊本青年学校の開校式（第一期生）。 ・「健軍寮」が完成。 ・「健菱園」への入居開始。 ・飛行場の滑走路が完成。
1944年	・「熊本航空機製作所」として発足。
1945年	・市電、水前寺駅－三菱工場前駅区間が開通。 ・健軍1-4寮と秋津1-2寮が焼失。 ・工場は分散疎開。
1947年	・工場の農機具工場「熊本機器製作所」として再出発。
1949年	・「熊本機器製作所」が閉鎖。
1950年頃	・健軍寮跡地（1-4寮）、水前寺社宅「前菱園」などを政府へ物納。 ・「健菱園」と「水菱園」は一般市民に払い下げ。
1954年	・熊航跡地の一角に陸上自衛隊健軍駐屯地が開設。
1960年	・元熊本陸軍飛行場が「熊本空港（熊本市健軍町と託麻村）として供用開始。
1967年	・県庁移転。
1975年	・熊航跡地や周辺エリアに官公庁、諸学校、諸企業が群立。 ・熊本赤十字病院（以下、日赤病院）が旧熊本空港の跡地に完成。
1980年	・熊本女子大学（現熊本県立大学）が大江町から旧熊本空港の跡地に移転。

街などの福利厚生施設の敷地買収と建設は三菱重工業によって進められた[18]。後に工員が飛躍的に急増し、社宅数が足りなくなったため、住宅営団が建て、三菱重工業が買収した工員社宅が一部加わった（「健菱園」で582戸、「前菱園」で68戸が住宅営団によって建てられた。）。建設においては、設計を三菱地所(株)が担当し、熊航の工事を竹中組が、福利厚生施設の工事を大林組が担当した。陸軍は「健軍」という地名にこだわり、三菱重工業の誘致を進めたとされる。健軍村は古くは竹宮（たけみや）村とも呼ばれていたが、明治に健軍（たけみや）と表記されるようになった。その後、神水村との合併により健軍（けんぐん）村が成立し、1936年には熊本市に編入された。

1942年、建設工事がはじまった時、市電は水前寺公園駅が終点であり、旧木山街道のみが健軍エリアと中心市街地をつなぐ道であった。社宅街だけでなく、他地域から熊航へ通う工員が増えるにつれ、1945年5月には市電が今の健軍町停留場まで伸びた。さらに、熊航へ物資を運ぶためにJR（当時省線）水前寺駅から熊航まで専用鉄道（引込線）が省線によって引かれた。現在、引込線は車道としてつかわれているが、未だに「旧三菱引込線」と呼ばれている。1947年の空中写真には熊航の中央部から西側に中心市街地をつなぐ道路が確認でき、戦時中に熊航とともにつくられたと推測できる（図5の中央）。1967年にはこの道路沿いに県庁が移転してくる（図6の右方）。

2-2. 戦時中の社宅街「健菱園」と工員寮（図8）

健軍エリアには、基幹工員の妻帯者が入居する工員社宅「健菱園」と、独身者を収容する男性用の「健軍寮」（1寮-5寮、8寮）、女性用の「秋津寮」（秋津1寮、秋津2寮）がつくられた。工員社宅である「健菱園」は長屋タイプの社宅2戸が3-5棟、等間隔に並べられた街区によって構成される（図7）。一戸は6畳1間、4.5畳2間、玄関、台所、トイレから成る床面積13-14坪程（敷地面積40坪）であった。内風呂が付いていなかったため、「健菱園」内の北側と南側にある共同浴場が普段利用された（図8の左側の上と下）。工員寮「健軍寮」と「秋津寮」は木造の二階建てで、一部屋が12畳でそこに5人ずつ居住していた。空襲により8つの寮のうち、5寮と8寮、秋津2寮のみが残った。

社宅街は大きく3回角度を振っており、その間には三角形の空き地が配置されている。社宅街には大通りが南北軸と東西軸に設けられ、南北軸の通りは「健菱園」と寮エリアの間に位置し、東西軸の通りは「水菱園」と「健菱園」をむすぶ連絡道路まで延ばされた。「カミク工事 福利施設配置図」では、大通り沿いには隅切り、歩車分離、街路緑化と見られるデザインが確認できる。さらには、火除地と見られる約45m×25mの空き地が東西軸沿いに等間隔で配置されており、戦時中の空襲に備えようとしたと考えられる。『熊本日日新聞』（1943年12月12日）[19]には、健軍町において旧木山街道の整備や市電の延長とともに5,000戸の民有地や公設運動場などをつくる土地区画整理事業が発表されている。三菱重工業の社宅街づくりが行われた時期に、社宅街と中心市街地をむすぶエリアにおけるまちづくりも進んだのである。

2-3. 戦後の健軍エリアの変遷

戦後の健軍エリアの変遷について、「形成期」「成長期」「拡張期」「衰退期」の4つの時期別にまとめる。

(1) 健軍エリアの形成期（1945-1958）の変遷

熊航は1945年前半に疎開された。戦後の1947年には熊本機器製作所として農機具生産に転換したが、1949年に閉鎖した。その後、政府に返還され、最終的には陸上自衛隊（1954年開設）と小中高校、公営住宅など公共施設に変わった。一方、三菱重工業が所有・管理していた社宅街の場合、「健軍寮」の焼け跡（1-4寮）と「前菱園」などは、1946年10月に公布された戦時補償特別措置法に基づき政府に物納することになり、「健菱園」と「水菱園」は1950年頃から一般市民に払い下げされた。このような段階を経て、社宅街は住宅や店舗に変わった。

1950年頃から店舗ができ始め、1953年に発生した6.26

図8 「健菱園」「健軍寮」「秋津寮」の配置図 （「カミク工事福利施設配置図」をもとに作成）

水害で被害を受けた熊本市中心部の人たちが健軍エリアに移り住んだり店を開くことで、商店街として成り立つようになった。地域の有志で道路の舗装を行ったり、1954年には400本程の桜を植樹するなど、地元住民によるまちづくりが進められた。1959年には「健軍商店街」沿いに木造のアーケードがつくられた。

1956年の空中写真には、「水菱園」「健菱園」をはじめ電車通り沿いに建物が立ち並ぶ。「健軍町6,000番地」と呼ばれていた健軍エリアは、1956年から東町、若葉町、栄町など8つの町に地番が分かれた[20]。『熊本日日新聞』（1959年4月1日）によると、1959年には健軍町を含む東部の地価が2-3倍に上がるほど、「住宅地として発展をつづけている熊本市東部地区」での宅地ブームが起きた[21]。半面、1956年の空中写真によると、熊航の東側と飛行場の南側は田畑としてつかわれている。

(2) 健軍エリアの成長期（1958-1978）の変遷

5寮と8寮、秋津2寮は、住宅地図に基づくと、1965年頃から市営住宅や県営住宅など公営住宅に変わった[22]。「健軍商店街」「健軍中央通り」「動物園通り」と複数の商店街をもつ健軍エリアは、1965年から1970年にかけて熊本市内でも最も栄える繁華街の一つとして成長する[23]。

1969年の空中写真では「水菱園」と「健菱園」をつないでいた連絡道路が、「秋津寮」の東側まで延びており、熊航の東側にはその軸に合わせ区画整理が進んでいる（図6の右中央）。戦時中の軸をもとに、まちが東側に拡張していることが分かる。 1960年には、元熊本陸軍飛行場が「熊本空港」[24]として供用開始した。

(3) 健軍エリアの拡張期（1978-2001）の変遷

1975年に新「熊本空港」がつくられ、その跡地には日赤病院（1975）、熊本女子大学（1980。今の熊本県立大学を指す。以下、県大と省略）などが、熊航の南側には小中高校、公営住宅などが立地しはじめる（図6、図7）。さらに、熊

航の中央部から東側にも道路が伸びている(図6の右中央)。1983年の2.5万地形図[25]では、1969年頃に区画整理されていたエリアにも建物が立ち並んでいる（図6の右中央)。

(4) 健軍エリアの安定期（2001-2019）の変遷

健軍エリアの南側までまちが広がっており、例えば、2003年の空中写真では健軍商店街から江津湖の南側に道路が伸びており、健軍商店街へのアクセスがより便利になった(図6と図7の下方)。しかし、高齢化や郊外での大型店舗の増加により、商店街は寂れはじめている。さらに、2016年に発生した熊本地震により商店街のアーケードが崩落したり、複数の店舗が一時閉店したものの、現在は、復旧しかつての健軍に賑わいを取り戻そうとしている。そこで、健軍エリアを盛り上げようと、「健軍特区」という緩いつながりや「つなGOランド」というマルシェイベントなど、いくつかの取り組みが進められている。

図9 1958年の建物用途図

図10 1978年の建物用途図

図11 2001年の建物用途図

図12 2016年の建物用途図

(5) 小結

「形成期」である1950年代後半より、電車通りの社宅街は早くとも店舗や住宅が立ち並び、有志によって道整備も行われ、商店街と住宅地としていち早く形を変えた。高度成長期の「成長期」には健軍商店街が全盛期を迎える。1969年には熊航の東側も区画整理が進んだ。戦後、田畑としてつかわれていた飛行場は1960年から熊本空港としてつかわれるようになった。「拡張期」には、熊本空港の跡地に日赤病院や大学が立地するなど、東区の西北部にも市街地が広がった。東区北部のバイパス沿いと東北部の市街化調整区域（託麻北・託麻東）を除くと、今の東区の基本的な構図は熊航、飛行場と社宅街に基づいていると言える(図7)。

3．建物用途の変遷[26]

建物用途を店舗、住宅、空き家、その他、駐車場の5つに分け、形成期、成長期、安定期、衰退期の4つの時期別に分析を行う（図9-図13、表2-3)。対象は戦時中に社宅や寮が建っていた範囲とする。

(1) 社宅街の形成期（1943-1958）の建物用途の変遷

1943年に店舗が4棟、住宅は979棟であったのに対し、1958年には、店舗が286棟、住宅は1,080棟、空き家は15棟であった。駐車場以外は増加が見られる。店舗が98.6%増加し、住宅は9.4%増加しており、戦時中と比べ、店舗が急増していることが分かる。

「電車通り」には百貨店、銀行、映画館などが立地し、「健軍中央通り」「健軍商店街」沿いにはクリニック、洋服店、書店などが立地しており、面的に成長しはじめてい

表 2 建物用途の分類[27]

店舗	小売業、卸売業、外食系、サービス業、病院等
住宅	個人名、団地、アパート、マンション、〇〇ハイツ等
空き家	建物の形はあるが、表記がないもの
その他	倉庫、公共施設、判別不能なもの（判別不能街区を含む）[28]
駐車場	駐車場と表記されているもの

表 3 用途別の棟数（n=棟又は所）[29]

建物用途	1943 年	1958 年	1978 年	2001 年	2016 年
店舗	4	286	607	460	363
住宅	979	1,080	1,475	1,131	1,068
空き家	0	15	89	70	145
その他	5	153	39	29	26
駐車場	0	0	79	136	195
計	988	1,534	2,289	1,826	1,797

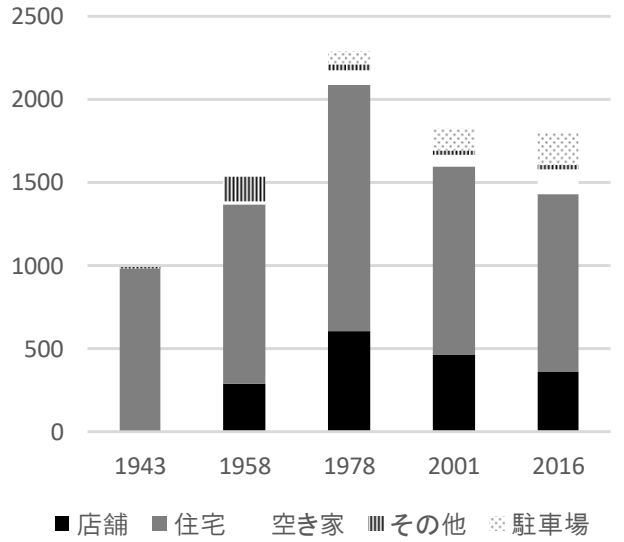

図 13 用途別の棟数グラフ（n=棟又は所）

ることが分かる。特に、1-4 寮の跡地が区画整理され、社宅街時代に大通りであった「健軍中央通り」よりも多くの店舗と住宅が建ち並んでいる（図 8 の右上方）。

(2) 社宅街の成長期（1958-1978）の建物用途の変遷

1965 年には、8 区画が合併され 240 坪の中型スーパーで屋上に小規模な遊園地のある「かめ屋」が開店した。ローラースケート場など娯楽施設も開店し、商店街としての集客力を高めた。「健軍商店街」「健軍中央通り」「電車通り」だけでなく、「動物園通り」沿いにも店舗が集積しており、健軍エリアの全盛期と言える。

1958 年（図 8 の左方・下方）には空き地が目立っていた外側の敷地にも住宅や店舗が立ち並んでいることが分かる。1978 年には、店舗が 607 棟、住宅は 1,475 棟、空き家は 89 棟、駐車場は 78 所になる。全ての項目が増加しており、特に店舗は 52.9%増加、住宅は 26.8%増加、空き家は 83.1%増加した。

広大な面積の駐車場がスーパーマーケットや銀行等の大型商業・業務施設のものとして、急増している。特に、比較的大きい区画に分かれた 1 寮、2 寮だった街区で駐車場が目立つようになっている。

(3) 社宅街の安定期（1978-2001）の建物用途の変遷

2001 年には、店舗が 460 棟、住宅は 1,131 棟、空き家は 70 棟、駐車場は 136 所になる。駐車場以外の項目で減少がみられる。店舗は 32.0%減少、住宅は 30.4%減少しており、総棟数も 463 棟が減少している。特に「健軍中央通り」と「動物園通り」沿いの店舗が住宅に変わっており、商店街としての雰囲気が薄まっている。

住宅地図の比較と現地調査を通し、店舗、住宅、駐車場における減少が、敷地の合併によるものであることが確認できた。特に住宅の場合、敷地の合併に伴い庭を設ける場合が見られている。安定期に入っているとも言える。

(4) 社宅街の衰退期（2001-2016）の建物用途の変遷

2016 年になると、店舗が 363 棟、住宅は 1,068 棟、空き家は 145 棟、駐車場は 195 所になる。総棟数は前期と比べると、29 棟しか減っていない。半面、店舗は 26.7%減少、住宅は 5.9%減少、空き家は 51.7%増加しており、地域の衰退が起きていることが分かる。安定期では住宅の合併が 23 件あったのに対し、衰退期になると合併が 5 件にとどまっており、敷地の合併による減少ではないことが分かる。

(5) 小結

形成期、成長期を経ながら、1978 年には店舗数が急増し、小売店、飲食店をはじめ、金融機関、医療機関などの揃った繁華街として成長してきたことが分かった。「形成期」では、かつての大通りであった「健軍中央通り」よりも、区画整理された「健軍商店街」沿いに多くの店舗が集まっていた。「成長期」には、「健軍中央通り」沿いだけでなく、「健軍商店街」「電車通り」「動物園通り」まで多くの店舗が集積していた。

しかし、2016 年になると、「健軍商店街」のみ商店街としての名残が残るようになっている。店舗や住宅の減少、空き家の急増が起きており、衰退期に入っていることが分かった。

4．街区の変遷[30]

4-1. 街区の変遷

5 寮と 8 寮のあった街区には、公営住宅や文化ホールがつくられ、郵便局や管理事務所などの福祉厚生施設の跡地には消防署、幼稚園、公園などの公共施設がつくられた（表 4）。ただ、店舗と住宅に変わった場合もあった。

一方、「カミク工事 福利施設配置図」と 2016 年の建物用途図（図 12）の街区を比較すると、敷地の合併は頻繁に行われているものの、街区レベルでの変化はほとんど見られていない。健軍中央通りや寮の跡地、社宅街エリアの外側を除くと、街区がそのままであることが確認できる。

4-2. 火除地の変遷

戦時中に計画的につくられた火除地は、比較的大きな正方形の空き地だったため、公園、ゲートーボール場、広場

表 4 寮と福祉厚生施設の変容

1943年当時の名称	1958年	1978年	2001年	2016年
1寮	店舗	店舗・駐車場	店舗・駐車場	店舗・駐車場
2寮	スーパー・住宅	スーパー（２つ）・店舗・駐車場	スーパー（２つ）・店舗・駐車場	スーパー（２つ）・店舗・駐車場
3寮	店舗・住宅	店舗・住宅	店舗・住宅・駐車場	店舗・住宅・駐車場
4寮	住宅	住宅・店舗	店舗・住宅・駐車場	店舗・住宅・駐車場
5寮	5寮・店舗	公営住宅 店舗	健軍文化ホール・公営住宅・店舗	健軍文化ホール・公営住宅・店舗
8寮	8寮・店舗	公営住宅 店舗	公営住宅 店舗	公営住宅 店舗
秋津1-2寮	秋津2寮・住宅	公営住宅・住宅	公営住宅・住宅	公営住宅・住宅・駐車場
空き地	遊園地	公園	公園	公園
町集会	一戸建住宅	店舗と住宅	店舗と住宅	店舗と住宅
管理事務所	幼稚園	幼稚園	幼稚園	幼稚園
郵便局	消防署	検査所 消防署	検査所 消防署	検査所 消防署
巡査	郵便局	郵便局・住宅	店舗と住宅	店舗と住宅
消防署	店舗	店舗	店舗と住宅	店舗と住宅

表 5 火除地の変容

1943年当時の火除地の地番	1958年	1978年	2001年	2016年
ほ－1	空き地	駐車場・一戸建住宅	一戸建住宅	駐車場
ほ－3	空き地	集合住宅	集合住宅	集合住宅
ほ－2	空き地	集合住宅	集合住宅	集合住宅
ほ－4	空き地	集合住宅	集合住宅	集合住宅
へ－1	（不明）	集合住宅	集合住宅	集合住宅
へ－3	空き地	集合住宅	集合住宅	集合住宅
へ－2	（不明）	一戸建住宅	集合住宅	集合住宅
へ－4	（不明）	病院	駐車場・空き地	駐車場・空き地
ち－1	（不明）	一戸建住宅	公園・ゲートボール場	公園・空き地
ち－2	（不明）	一戸建住宅	一戸建住宅	一戸建住宅
と－1	空き地 一戸建住宅	一戸建住宅	一戸建住宅	一戸建住宅
と－3	空き地 一戸建て住宅	一戸建住宅	広場・公園	広場・公園
と－2	一戸建て住宅	一戸建住宅	一戸建住宅	一戸建住宅
と－4	一戸建て住宅	一戸建住宅	空き地	一戸建住宅・店舗

などの公共施設または集合住宅に変わっていった（表 5）。戸建住宅が建ち並び、近くの街区に吸収される場合があったものの、北側の道路沿いは元の街区の形を維持したまま、今に至る（図 12 の左上方）。

5．まとめ

本研究では、先行研究の成果を踏まえながらも、土地利用の変遷に着目し、社宅街を中心とした健軍エリアがどのように熊本市東部の中心地として成長したのかを以下の点で明らかにした。

(1) 旧木山街道沿いの小さな集落、健軍村があったにすぎない健軍エリアが、近代都市計画的な要素が多く反映された熊航と社宅街に変わっていく建設過程についてまとめた。陸軍航空本部の要請を受け、1942 年から建設がはじまった熊航の周囲には飛行場、社宅や寮、付属病院、青年学校が建設された。社宅街の道路は隅取りと歩車分離が行われ、火除地とみられる空き地が配置された。さらに、専用線である引込線と市電が健軍まで延伸され、道路も整備された。

(2) 戦時中に建設された都市基盤施設との関連に着目して、健軍エリアの戦後の変容過程をまとめた。一般市民に払い下げられた熊航の社宅街のうちの工員社宅は住宅や店舗に、寮は公営住宅や店舗などに置き換わった。また、熊航の跡地には陸上自衛隊が駐屯し、飛行場の跡地には日赤病院や大学が立地した。もとの社宅街エリアではグリッド状の道路網は引き継がれ、主な道路は周辺にも延伸した。

(3) 戦後の社宅街を対象に、建物用途と街区の変遷を詳細に分析した。戦後、1958 年までの間に店舗数が急増し、特に寮の跡地が区画整理されて店舗と住宅が建ち並んだ。さらに、1978 年までの間に、商業施設をはじめ、医療施設、金融機関、公営住宅が集積した。一方で、2000 年代に入ると店舗や商店が減少し、健軍エリアの衰退が始まったと考えられる。

以上のように、健軍エリアが戦時中の都市基盤施設をもとに戦後、東部の中心地としてどのように成長したのかについてまとめた。熊航や飛行場の跡地とともに、戦時中につくられた引込線や、延ばされた市電沿いに県庁、自衛隊、日赤病院、大学など求心力の高い各種官公署が集積することで、健軍エリアは商店街や住宅地とともに、主要公共施設を備えた東部の中心地として成長することができた。

しかし、70 年も過ぎた「オールド・ニュータウン」は空き家の増加とともに、高齢化が東区の中でももっと進んでおり[31]、対策が必要である。また、社宅が少なくなっており、社宅街としての名残を感じにくくなっている。唯一、1955 年の開店した「寮前薬局」は現在まで営業中であり、かつての名残を伝えてくれる。今後は、熊航と社宅街に関する案内板を設置するなど、継承活動が必要であろう。

本研究では建物用途を棟数で集計しており、より厳密な分析のためには、戸数で追加調査を行う必要がある。また、社宅の残存に関しては扱っておらず、今後の課題とする。

【謝辞】

本研究は、麻田瑠美氏の熊本県立大学卒業論文（2011）と瀬口琴乃氏の卒業論文（2018）をもとに作成したものである。ここに記して感謝申し上げます。

【注釈】

(1) 三菱経済研究所史料館所蔵「カミク工事 工事記録写真」（1942.10.10-1948：計 470 枚）のうち、写真番号 435（1943.7.8 撮影）

(2) 三菱経済研究所史料館所蔵「カミク工事 工事記録写真」（1942.10.10-1948：計 470 枚）のうち、写真番号 416（1943.5.8 撮影）

(3) 三菱重工業名古屋航空宇宙システム製作所史料室所蔵「カミク

工事 福利施設配置図」２種（1943.7.27 付，1944.9.5 付/同 12.5 付，「三菱地所株式会社設計課」との記載あり）。「カミク」とは熊本工場の略号である。官設・民営・熊本工場の頭文字を取ったものである。

(4) 国土地理院所蔵，1947.03.13 撮影

(5) 国土地理院所蔵，2003.05.01 撮影

(6) M 氏（健軍校区第二町内自治会）、U 氏（おちゃいち山陽堂）、I 氏（井川電気）、N 氏（寮前薬局）、Y 氏（熊本県立大学）の 5 名に、健軍商店街の歴史、三菱重工業や市からの払い下げ、健軍エリアへ移住した理由についてヒアリング調査を実施した（2018 年 10 月 7 日、2019 年 1 月 24 日、2019 年 3 月 9 日の 3 回実施）。

(7) 国土地理院所蔵，1956.03.28/1956.11.05 撮影

(8) 国土地理院所蔵，1969. 06.04 撮影

(9) 熊本県立図書館所蔵，熊本都市計画総括図-その１-，2014 発行

(10) 熊本市中心市街地以外の商業地域は、北区の植木エリア、富合エリア、そして健軍エリアの３か所しかない。

(11) 文献 1)を参照。

(12) 文献 1)、10)、11)をもとに記述した。また、各種施設の位置などは（注 3）を、施設の詳細は（注 1、2）などから読み取った。

(13) 熊本県立図書館所蔵，熊本市街地図，1942.3.10 発行

(14) 注(4)をもとに作成した。戦後まもなくの時代は都市基盤施設の整備がほとんど行われていなかったと想定し、1947 年の空中写真をもとに戦時中（1945 年基準）の都市基盤施設図を作成した。

(15) 注(9)、文献 16)をもとに作成した。2106 年基準にする。

(16) 注(4)、(9)、文献 1)、10)、11)、16)、20)、21)をもとに作成した。

(17) 文献 1)、11)、18)を参照。

(18) 文献 1)を参照。

(19) 文献 11)を参照。

(20) 文献 17）を参照。1978 年の住宅地図には元飛行場エリア（今の月出・長嶺）も「健軍町」と書かれており、当時も東区北部まで健軍町という地名が残っていたことが確認できる。

文献 1)、10)、11)をもとに記述した。また、各種商業施設の立地などはヒアリング調査と文献 1)などから読み取った。

(21) 文献 11)を参照。

(22) 1958 年の住宅地図上では、八寮と明記されていたが、1965 年には「市営団地（旧八寮）」「市営若葉団地」と明記されてある。

(23) M 氏、U 氏へのヒアリング内容をもとに記述した。

(24) 健軍町に位置しており、健軍空港とも呼ばれていた。

(25) 熊本県立図書館所蔵，2.5 万地形図，1983 測量，1984/09/30 発行

(26) 注(7)、文献 13)、14)、15)、16)、そして現地調査をもとにまとめた。

(27) 「百貨店」「ストア」「市場」「〇店」など小売業などを店舗と見なした。

(28) 世帯主名や店名が記載されていない場合、街区レベルで住宅地図に載っていない場合などは、「その他」と見なした。

(29) 1958 年の判別不能街区の建物数は、空中写真(1956 年)上の建物数に見なした。

(30) 注(7)、文献 13)、14)、15)、16)、そして現地調査をもとにまとめた。

(31) 文献 17）を参照。

【参考文献】

1) 岡野允俊編：健軍三菱物語 -熊本は東へ-，岡野允俊， 1989
2) 中西誠一：三菱熊本青年学校物語，中西誠一，1994
3) 中西誠一：三菱熊航物語，中西誠一，2000
4) 麻田瑠美・辻原万規彦：旧三菱重工業熊本航空機製作所の社宅街の概要と現況，日本建築学会研究報告九州支部，No.50，pp.593-596, 2011
5) 角哲・角幸博・池上重康：王子製紙(株)苫小牧工場社宅街について，日本建築学会計画系論文集，N0.619，pp.165-172，2007
6) 中野茂夫・平井直樹・藤谷陽悦：倉敷紡績株式会社の寄宿舎・職工社宅の推移と大原孫三郎の住宅施策 -近代日本における紡績業の労働者住宅 その１-，日本建築学会計画系論文集，No.659，pp.193-202，2011
7) 中野茂夫・小山雄資・不破正仁・中島伸：戦時下における日立製作所の社宅街と内田祥三の住宅地計画:－日立製作所日立工場・多賀工場・水戸工場の社宅街を事例に－，日本建築学会計画系論文集，No.708，pp.441-451，2015
8) 鈴木栄基：地方都市における社宅街の変容とその資源の継承に関する考察：砂川市を事例として，日本都市計画学会論文集，No.43-3，pp.205-210，2008
9) 足立壮太・大月敏雄・谷口尚弘・安武敦子・橋本泰作・竹村潤：社宅街の変容が居住者人口構造に及ぼす影響に関する研究 ―福岡県大牟田市３地区を事例に―，日本建築学会研究報告集，No.88，pp.315-318，2018
10) 三菱重工業株式会社社史編纂室編：三菱重工業株式会社史，三菱重工業，1956
11) 新熊本市史編纂委員会：新熊本市史-史料編-，熊本市，Vol.8，No.1-2，1994
12) 善隣出版社：ゼンリンの住宅地図・熊本（市），善隣出版社，1965
13) 住宅詳細案内図発行会：熊本市住宅案内図，熊本市，1958
14) 善隣出版社 ：ゼンリンの住宅地図・熊本市東部 1978，善隣出版社，1977
15) 善隣出版社：ゼンリンの住宅地図・熊本市東部 2001，善隣出版社，2001
16) 善隣出版社：ゼンリンの住宅地図・熊本市東区，善隣出版社，2016
17) 東区役所総務企画課：熊本市東区まちづくりビジョン，東区役所総務企画課，2013
18) 熊本市：熊本市都市マスタープラン（全体構想），熊本市，2016.08
19) 太江田真宏・蓑茂寿太郎：政令指定都市「熊本」の合併の歴史的変遷と現在，熊本市都市政策研究所，熊本都市政策，Vol.2，2013